

近世初期における真継家の鋳物師支配

——宗弘と真継家——

笹 本 正 治

はじめに

一九八一年度には、小原昭二氏の「近世における真継家の鋳物師支配について」⁽¹⁾、拙稿「中世・近世の美濃鋳物師」・「三河牛久保の鋳物師と真継家」⁽²⁾と、近世の真継家による鋳物師支配にかかわる論文が三本出て、改めてこの方面に光があてられるようになった。ところで柴田一雄氏は小原氏と私の論文について、『史学雑誌・一九八一年の歴史学界——回顧と展望——』の中で、「両者の間には真継家の鋳物師統制についての考え方に違いがあるように思われるが、これは単に分析視覚の違いによるものであろうか」⁽³⁾と述べられた。

柴田氏の指摘は近世の真継家と鋳物師の関連をどうみるかということであるが、目下その歴史的評価は二つに分かれている。一つは中川弘泰氏が『近世の鋳物師——真継家を中心として——』で示された、「真継家は、江戸時代に入ると、家康公の支配許可を背景にしてしだいに勢力を強め、江戸中期迄が最盛期であったろうと思われる。しかし江

戸中期頃からは、統制もむずかしくなってきたことも事実である」⁽⁴⁾というように、支配は近世前期が最も強く中期以降に弱くなるとする説で、小原氏も中川説と同様「近世中期以降急速に鋳物師の真継離れが進行していた」⁽⁵⁾との見解をとっている。そして一般にはこれが通説として用いられている。一方、私は「甲斐の鋳物師」以来、中川氏が真継家による鋳物師支配の典型としてあげるような支配方法は、珍弘の代の十八世紀以後に採用されたものであり、真継家と鋳物師の関係は近世の中期以降に強くなったと主張してきた。

このように全く相反する説が生じた最大の理由は、『徳川禁令考』⁽⁶⁾に採録されている真継量弘の願書の位置付けの相違である。あえて言うなら、中川氏・小原氏とも願書の文意をそのままに受けとり、何故にこの願書を量弘が提出せねばならなかったのかという歴史的考察を欠いたがため、あのような結論になったのだと思う。⁽⁸⁾そしてもう一つの原因は、御蔵宗弘が制定したという天正四（一五七六）年の座法、および真継家と徳川家康との関係についての評価の差である。

ちなみに小原氏の視点で中川氏と異なるのは、中川氏が真継家の鋳物師支配は家康を背景にして強くなったのに対し、「なぜ真継家が鋳物師統制の基本法である天正四年の『鋳物師職座法之掟』（以下天正座法という）を、近世後期にいたるも維持しえたのであろうか」として、天正座法を重視することである。この小原氏の問題発想をみてみると、

一、天正座法を制定したのは真継久直の子で、康綱の父にあたる真継宗弘である。

二、真継家の鋳物師支配体制は天正四年までに座法を制定し、これによって鋳物師を統制できる程整っていた。

三、天正座法は天正四年につくられ、以後真継家の鋳物師支配の基本法とされた。

という、少なくとも三つが前提になっていると思う。ところが私はこの三点に疑いを持っている。中川氏も天正座法自体は認めている⁹⁾ようなので、これまでの通説は天正座法を高く評価することで近世前期に真継家の支配が強かったとし、量弘の願書から近世中期以降に支配が弱まったと結論付けたといえる。そこで量弘の願書の評価は別の機会にすることとして、本稿では戦国時代の真継家の動向をみながら、天正座法をめぐる右の前提、および徳川家康が本当に真継家の支配をバックアップしたのかといった点について検討を加えたい。

なお真継家の鋳物師支配は、公家による職人支配に深くかわり、戦国時代から幕末にいたるまでの職人の全国組織や、その中における

公家の役割などを解明する手がかりとなる。また真継家の支配が、これまでの説のように近世前期に最も強かったということであれば、この頃まで公家はある程度の勢力を維持しており、それが近世を通じて次第に弱まっていったことになる。逆に近世中期以降強くなったとすると、公家の力も何等かの形で中期以降強まった可能性はある。こうした歴史事実を明らかにしその原因を考えることによって、はじめて近世史全体の中に公家を位置付けることができるようになると思われる。その意味でも真継家の鋳物師支配の実態追求はたいへん重要であろう。

一、戦国時代の真継家

宗弘について知るためには、まず戦国時代に真継家がどのような動向を示したかを確認しておく必要がある。既に網野善彦氏によって彼の父とされる久直、子とされる康綱についてはだいたいの動きが明らかにされている¹⁰⁾ので、氏の研究を下地にして、名古屋大学文学部が所蔵する真継家文書から、戦国時代の真継家を概察し、天正四年に宗弘が座法を制定することができるような状況であったか否かを考えてみたい。

真継家の系図を見ると、有弘と久直の間に新見から真継へ改姓され、名前の通字として用いられてきた「弘」の字が消えているが、この混乱は久直の新見家相続によるものである。弥五郎久直は新九郎の子として生まれた。父は幼少から公家の柳原家に奉公し、一時甘露寺

家にも召使われたが再度柳原家へ帰参したという「六町」の住人で、町衆の代表でもあった。¹²⁾この縁により久直も柳原家へ仕え公家社会に精通していた。真継氏については大永六（一五二六）年の「酩引付」に真継弥兵衛尉が、前左大臣三条実香家の借錢十五貫文余の銭主として姿を見せ、同姓で公家と関係を持つことから久直の一族と考えられる。そこで真継家は十六世紀前半までにかんがりの蓄財をしていたものと思われる。

一方、新見家は長らく藏人所小舎人として鑄物師を支配してきたが、有弘の時には財政が破綻して真継新九郎からかなりの借財をしていたようである。また大永七（一五二七）年に有弘の子の孫三郎が盗人と与したとして首を刎ねられさらしものにされるなど、経済的にも社会的にも困難に直面していた。こうした中で有弘は天文五（一五三六）年跡職を一旦実子の弥三郎忠弘へ譲ったが、天文八（一五三九）年改めて久直へ譲り渡した。有弘の立場からすると新九郎父子に負った借財の故に、跡職を久直へ譲らねばならなかったであろう。その後忠弘は久直に下京の無縁所にすてられ、歩くこともかなわず餓死したという。

天文十二（一五四三）年三月十六日、「有弘跡職并鑄物師支配役儀一家之内^{ヨリ}相防¹³⁾」¹³⁾という事件が起きたため、久直は有弘の譲り状を証拠に言上し、後奈良天皇の綸旨を得て正式に有弘の跡職相続を確認された。しかし天文十五年（一五四六）年には弥三郎の子富弘が久直の不当を朝廷に訴え、両者の間で激しいやりとりがなされた。結局、同

年五月五日付の後奈良天皇女房奉書によって久直の勝訴となり、彼の新見家相続が確たるものになった。

久直が貸付金のかたに新見家を相続したのは、鑄物師支配による収益に着目したためと思われ、後奈良天皇によって公に相続を認められると早速今川義元と連絡をとり、六月十一日付で「内裏様被仰下候鑄物師之儀、諸役門次棟別并諸関駒口商売役等、悉以座法御免除之筋目、任院宣之旨、分国中無相違申付候」という返書を得た。しかし今川領国への工策は、富弘との争論に忙殺され実を結ばなかったようである。

久直の活動は富弘に勝訴してから本格化し、天文十七年以降大内氏に働きかけを行い、中国・九州地方の鑄物師と連絡をとろうとした。大内氏からは支配の根拠となる証文の提出を求められたので、通路が物騒なことを理由に証文の写を送ることの了承を得、改竄した文書を利用して大内氏の信用を獲得した。彼の言い分を認めた大内氏奉行人は翌年三月に安芸・周防・長門・石見・豊前・筑前の各守護へ、諸国鑄物師の公事役を久直の催促に従って勤めるよう申し触れることを求めた連署状を、久直の提出した証文とともに送付したので、一部に障害はあったものの、この地域で真継家が鑄物師と接触することが可能になった。そこで久直は図師吉次を伴い、施行状を携えて大内氏領国を遍歴しその実行を求めた。この結果石見では「鑄物師役之儀、如毎年其調申付」という成果をあげ、また山根常安が「石見国鑄物師頭領」の証跡を望んだので吉次がこれを調べて御礼銭を得るなど、真継家と

個々の鑄物師との結びつきができた。はじめた。

大内領国における真継家の鑄物師支配は天文十九(一五五〇)年九月にそれまで久直を後援していた相良武任が出奔し、また翌年九月には大内義隆が陶晴賢に攻められて自殺したため、活動の支柱を失った。さらにこの頃、外記局を背景に内豎男と称する者が久直の鑄物師支配を押防するという事件も重った。

この難局にあたって、彼は天文二十年十一月十三日付の後奈良天皇綸旨を得ることで態勢立て直しをはかった。なお当時久直は次の鑄物師支配の目的地として上杉景虎領国を選び上杉氏と連絡をとったが、大内領国の混乱や内豎男の動きに対応することに迫られ、実効はあげえなかったようである。大内氏滅亡後の中国地方では新たに大友晴英・陶隆房が勢力を持ったが、真継家の鑄物師支配は両者にも承認され、さらに後には毛利氏もこれを認めた。

久直は永祿元(一五五八)年六月十七日付の正親町天皇綸旨により改めて有弘の跡職を安堵され、永祿九年には天皇即位ということで諸国の鑄物師に主殿寮の釜殿の湯釜を調進させ、鑄物師との連絡を密にした。その後正親町天皇は年未詳五月二十八日付で、「諸国釜屋衆之事者、従往古被成諸役御免許訖、然者任院宣旨、弥以無相違様、分国中事信長「可被仰下之由候也」という綸旨を出した。信長はこの綸旨に応じたようで、元龜二(一五七二)年には北畠氏の伊勢、天正八(一五八〇)年には柴田勝家の越前、天正十(一五八二)年には前田利家の越中、その他にも丹羽長秀の近江・瀧川一益の伊勢と、信長家

臣の領国内で次々と鑄物師に対し諸役が免許された。こうした状況から信長分国内の鑄物師は次第に真継家の配下に入っていたものと考えられる。同時にこの頃、久直は摂津・和泉・河内の鑄物師にも働きかけを行い、また伊勢との関係も深くなった。このうち伊勢の鑄物師からの年貢は一旦山科御藏修理によって押領されたが、天正八(一五八〇)年三月二十五日付の正親町天皇女房奉書を得て彼等を再度配下においた。

織田政権と結びつくことによって拡大した真継家の鑄物師支配は、豊臣改権にも承認されたようである。そして天正十四(一五八六)年十一月の後陽成天皇の即位には諸国の鑄物師から祝儀銭を徴収して献上し、以後天皇即位時に鑄物師から祝儀銭を徴収することが慣例となった。天正十七(一五八九)年には十一月二十七日付の徳川家の伝馬手形を入手し、翌年十二月に常陸の佐竹義宣・武蔵の江戸重道と連絡をとった。こうした活動には康綱があたっていたようであるが、この間に関東鑄物師も真継家の配下に入ったと考えられる。活動域を関東にまで広げた真継家は、朝廷に対する公用を名目にして各国の鑄物師との接触機会を増やし、慶長三(一五九八)年と慶長九年には吉例による臨時課役として指燭常灯の献上、慶長六年には女院の東御所への移徙の奉公などを命じた。

以上、戦国時代の真継家の動向の概略をみたのであるが、この限りでは宗弘という人物の事績を知ることができない。また彼が座法を制定したとされる天正四(一五七六)年には、真継家はやっと織田氏と

結びついたか否かという時期で信長領国全体の鑄物師を支配下に入れたわけではなく、まして関東にはまったく手をのばしておらず、全国的な鑄物師支配とはいえるような状況ではなかった。それ故天正四年に宗弘が整備した座法を制定したということについては疑問が生じてくる。

二、真継家系図と宗弘文書

それでは、天正座法を制定したとされる宗弘とはいったいどのような人物であろうか。一般に真継家系図として利用される『地下家伝』では、宗弘について「久直男 石見守 早世」とだけ記し、康綱については「宗弘男」としてある。また真継家文書中の『家伝』では、「父伊豆守 母 石見守 早世」としたあとに、「天正四年八月十三日 鑄物師 座法及言上相請印被成下、天正四年九月廿日真継家代替 御請印被成下藤原宗弘ト有之候、正親町院様御宇 天正八年閏三月廿五日山科修理相妨候節及言上、柳原殿副状女房奉書被成下宛」と説明している。

一方宗弘が出した文書は、未確認の内容不明のものを含めて六点あげることができる。一つは真継家文書中の『覚書帳』が、石見国邑智郡市山村の山根陸奥大掾を説明するに際して、「天文九御蔵宗弘右御免状所持」と記するものであるが、その文面がいかなるものであるのか、現存するの否かなどは不明である。二つは福岡県筑紫野市の平井文書中に残るもので、

近世初期における真継家の鑄物師支配（笹本）

（懸紙ウハ書）

・「釜屋所 御倉民部少丞宗弘」

為當年貢催促使者下向候、任先例員數、可致其沙汰状如件

天文十八年三月 日

御倉民部少丞（花押）

の文面を持つが、全く同じ文書が山口県下関市の安尾家にも残っている。また滋賀県八日市市の野々宮神社文書中には、

家々紋事、案内申候、心得申候、仍任先例筋目、可為裏菊所状如件

天文廿三年九月廿七日

御蔵民部丞（花押）

という判物がある。この三点は確実な文書であり、天文九年のものも『覚書帳』の性格からしてほぼ間違いなくあったものと考えられる。そこでこの頃に宗弘という人物が存在し、鑄物師の支配にあたっていたということは確実である。

前記の文書に加えて、天正四年八月十三日付の有名な「鑄物師職座法之掟」がある。それは、

鑄物師職座法之掟

一御公用被 仰出節者、尊

朝恩、無遲滞相勤儀、可為專要事

一御即位之御者、任先々吉例、御祝儀勤仕之儀、不可疎略事

一諸役御免除之事、無市料山料率分例物已下并諸関海渡等之煩、可

致往還、猶鑄物師中、自国他国相論之族有之者、則没収所帶、一

門之輩迄可被行死罪儀者、數通之御牒文言有之事

一鐘鑄等之事者、一国一郡ニ御牒并旧書等所持之者有之所正者、仮

令旧書頂戴之雖為鑄物師、其所_レ入乱鎡相建、令鑄管儀、堅可為
停止、其所_二由緒之鑄物師於無之者、格別也、況他方ヨリ入込候
者、互以入魂安靜可勉事

一受領之事者其人跡計_二而、無繼目輒子孫_二相伝儀有間敷事

一新鑄物師者勿論、御代々御牒_并御諭旨御文言、全為御禁止之儀、
猶宝徳年中差出請文百九人子孫之外、新儀之煩不可企巧、聊於違
乱之輩者、於不令停止者、既被成下處之旧書_并仁平年中ヨリ令経歴
供御人詮無之事

一依勤職之勝手廻国_并相替訳有之者、早速可申訟事、
一御倉代替之節者、祝儀如例可致馳走事、

右之趣、経高聞、永為鑄物師職座法定置處也、若於違変之者、急
度可逐糺明者也、仍如件

天正四年八月十三日

御藏宗弘判

という文面である。なおこの文書の表には「勅印」が朱で三カ所に捺
されていたとされている。さらに前掲『覚書帳』には、

（朱印影）

就御藏御代替之儀、従衆中可致祝儀之由、被仰出候、各存知其
旨、不寄多少、可致馳走之状如件

天正四年九月廿日

御藏宗弘判

鑄物師中

という文書も収録されている。

天正座法はその写が近世に真継家から配下の鑄物師に配布されてい

(1) 近世中期以降の真継家配布文書

| 文書の種類 真継家当主名 (文書発給期) | 鑄物師職許状 | 大工職許状 | 呼名許状 | 天正座法 | 座法 | 定 | 申渡 | 由緒書 | 仁安牒 | 天福牒 | 暦応牒 | その他 |
|------------------------------|----------------|-------|------|------|----|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 珍 _弘 (貞享5～享保18) | 159 (計 207) | 2 | 16 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 6 | 3 | 2 | 18 |
| 矩 _弘 (享保18～宝暦2) | 224 (249) | 3 | 6 | 0 | 2 | 2 | 0 | 0 | 3 | 3 | 4 | 2 |
| 親 _弘 (宝暦3～明和6) | 166 (191) | 5 | 0 | 1 | 1 | 7 | 2 | 0 | 1 | 1 | 4 | 3 |
| 量 _弘 (明和6～天明2) | 206 (248) | 9 | 0 | 2 | 1 | 5 | 4 | 0 | 9 | 5 | 1 | 6 |
| 康 _寧 (天明3～文政10) | 602 (910) | 67 | 1 | 2 | 61 | 5 | 13 | 3 | 39 | 52 | 30 | 35 |
| 則 _能 (文政11～嘉永3) | 308 (333) | 0 | 0 | 0 | 15 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 4 | 4 |
| 能 _弘 (嘉永4～明治7) | 616 (695) | 2 | 0 | 0 | 19 | 0 | 2 | 6 | 5 | 14 | 5 | 26 |
| 計 | 2,281 | 88 | 23 | 5 | 99 | 20 | 21 | 10 | 63 | 79 | 50 | 94 |

たこともあって、広く知られている文書である。しかし原本を伝えて
いてもよさそうな真継家文書中には、天正年中はおろか近世前期の写
すらなく、字体や紙質などからは近世中期以降に書かれたとしか考え

られないものしか残っていない。そして真継家がこれを鑄物師に配布した確実な時期は、(1)表のように一七五〇年代以降で、天正四年からは二百年近くも後である。座法の内容は近世中期以降の真継家と鑄物師の關係に合致することが多く、文言も近世の座法とよく似ていて、天正四年という時期の実態は反映されていないように思われる。前記の真継家の状態からしても天正座法が現実に発布され作動していたとは考え難い。一方、九月二十日付の宗弘判物は天正座法の成立を前提にして出されているが、座法そのものが偽文書の可能性が強く、しかも文書内容である久直から宗弘へという代替わりは、当時の真継家の動向からして考えられず、家伝などにも記録がない。また書式は御藏宗弘判と差出のところにありながら、文中にも印が捺されている。『覺書帳』の他の記載例からしてこの印は「天皇御璽」だったようで、この点もおかしい。そこでこの文書は天正座法に應ずるような形で後世に作った明らかな偽文書といえる。¹⁵⁾

以上の宗弘文書と系図とを見比べてみると、いくつかの奇妙な点が浮びあがってくる。その最大のもは、宗弘の文書発給期間を天文九年から天正四年とすると三十七年間にわたり、また宗弘の子とされる康綱は系図や家伝では天文二十一年生まれだといっているので、宗弘が天正座法を制定したとするなら、康綱の父となつてからだけでも少なくとも二十四年間は生きていたことになるのに、系図は宗弘が「早世」したと記していることである。また系図では宗弘を石見守としているが、文書では天文十八年御倉民部少丞、天文二十三年に御倉民部丞と

近世初期における真継家の鑄物師支配(笹本)

されていて、石見守とあるものは残っていない。仮に天文二十三年以後に石見守を任官したとしても、このことについて『家伝』などに何の記載もないのは不思議といわねばなるまい。さらに真継家の系図を見ると、有弘に至るまで代々名前に「弘」の字が使われているのに、久直が入り再び宗弘と「弘」が使用され、その後康綱から久忠に至る四代にわたってこれが用いられず、近世真継家の鑄物師支配を再編成する珍弘の前代に至って再び使われるようになり、以後「弘」が通字として再度復活するという経過からすると、宗弘という名前は真継家の名前の中で特異な位置を占めているといえる。加えて文書の発給期間が三十七年間にもおよび、座法を制定する程の人物であつたにしては、あまりにも関連文書が少ない。ちなみに真継家文書には久直の關係するものが百点近くあり、康綱のものも相当点数があるにもかかわらず、宗弘については当時の確実なものが一点も伝わっていないのである。そして何よりも宗弘文書の署名には真継という姓は全く見ることができない。

三、宗弘と新見家

真継家の系図と宗弘の出した文書との間に乖離があることを見てきたが、それでは宗弘はどのような人物だったのだろうか。

石見国山根家に「天文九御藏宗弘御免状」があつたとする『覺書帳』は、信頼に足りうる史料なので、天文九(一五四〇)年には宗弘の鑄物師支配のための活動がなされていたと考えられる。これに対し

真継久直が有弘の跡職を譲り請けるのは天文八年で、天文十二年に至って後奈良天皇から正式に認められ、同年今川義元領の鑄物師に働きかけをする。しかし、実際の支配活動は富弘との相論が終わった後、天文十八(一五四九)年の大内領国への工策からなので、宗弘が山根家へ文書を与えた天文九年にはまだ久直は活動を行っていなかったようである。この時期に御倉の人間として鑄物師を支配していたとすると、伝統的に支配をしてきた新見家の一族の者の可能性が高い。また天文十八年三月という久直が中国地方の鑄物師支配に着手したばかりの頃に、宗弘の名で年貢催促状がでていたことは、宗弘の名前なら年貢を徴収できるという何等かの理由があったためと推察される。さらに久直と康綱は天正十五(一五八七)年に連署状を出しているが、久直と宗弘、宗弘と康綱は、彼等が親子として活動していたことを示す史料を残していない。宗弘が真継家の一員で、しかも彼の出した文書が各地に残り、近世には彼の制定した座法が全国に配布された程の人物なら、久直や康綱程度に彼の文書が真継家文書にも残っていてもよい筈なのに一点も伝わっていないことも、実際には宗弘が真継家の者でないことを示していると思われる。加えて宗弘の名前には新見家の通字である「弘」が使われているのに、その子とされる康綱は用いていない。以上からしても、宗弘は真継家の一員ではなくむしろ久直にのっとられた新見家側の者と思われる。

それでは宗弘の鑄物師支配にはどのような特徴があるのだろうか。彼が鑄物師と関係した確実な期間は天文九年から天文二十三年の十四

年間で、真継家の活動が本格化するののは天文十七年からなので真継家と同時に支配にあたったのは七年間である。また宗弘文書が残っているのは近江・石見・周防・筑前で、西国特に中国地方を中心とする地域である。文書の内容は、石見では山根氏に統領職を免許、近江では裏菊紋の使用許可しており、筑前と周防では年貢の催促を行っている。つまり伝統的権威によりながら、個々の鑄物師から年貢を徴収しているのである。こうした宗弘の活動は彼が新見家側の一員なら、当然新見家の支配方法と直接つながると思われる。ところが新見家の鑄物師支配の様子を伝える史料は、久直の新見家相続が前述のように特異なものであったため、元来新見家に伝わった文書を久直が入手できなかったからであろうか、真継家文書には入っていない。このため新見家の支配の全貌は不明である。とはいっても、新見家が鑄物師から公事を徴収していたことは確実である。¹⁶⁾ その場合注目されるのは、近江出身で天正年中に信濃へ下ったと伝えられる筑摩郡松本飯田町の鑄物師田中伝右衛門が、天文二(一五三三)年三月の宣旨と、天文三年正月付の「御蔵判物」を持っていたことである。¹⁷⁾ 久直の旧書を伝えたときには「兵庫助久直旧書」、康綱では「康綱旧書」・「美濃守旧書」などとされ、「御蔵判物」といった記載はされない。そこで各地の鑄物師が持っていたという旧書のうち、御蔵判物・御蔵下知状などと記されるものは久直以前に新見家から発給された可能性が大きい。(2)表は各地の鑄物師でそうしたものを伝えていたという家である。このすべてを新見家が出したとは限らないが一応の目安として利用すると、四十

(2) 御蔵下知状所蔵者

近世初期における真継家の鑄物師支配（笹本）

| 居 住 地 | 名 前 | 居 住 地 | 名 前 |
|-------------|-----------|---------------|-------------|
| 山城 京綾小路室町 | 名 越 弥右衛門 | 丹波 天田郡福知山 | 足 立 加兵衛 |
| 河内 茨田郡枚方村 | 田 中 二左衛門 | 〃 天田郡新庄村 | 金 屋 権右衛門 |
| 和泉 大鳥郡堺津瓦町 | 池 田 次郎兵衛 | 〃 水上郡柿芝村 | 足 立 治右衛門 |
| 尾張 愛知郡名古屋 | 水野太郎左衛門 | 〃 〃 | 足 立 彦十郎 |
| 駿河 庵原郡江尻町 | 山田九郎左衛門 | 〃 〃 | 足 立 和兵衛 |
| 伊豆 君沢郡三島金屋町 | 山 本 八右衛門 | 〃 〃 | 足立次郎右衛門 |
| 相模 愛甲郡狹野村 | 木 村 平八郎 | 丹後 熊野郡佐野村 | 早川与二左衛門 |
| 近江 栗田郡辻村 | 太 田 角兵衛 | 但馬 出石郡出石町 | 五分一平右衛門 |
| 〃 滋賀郡納村 | 助 左 衛 門 | 〃 〃 | 五 分 一 小 兵 衛 |
| 〃 蒲生郡日野村 | 富 田 久兵衛 | 但馬 養父郡関宮村 | 梅 井 六兵衛 |
| 〃 蒲生郡八日市金屋村 | 釜 屋 善兵衛 | 播磨 佐用郡平福村 | 猪 狩 越中守 |
| 〃 坂田郡長浜北金屋 | 西 川 長左衛門 | 〃 〃 | 多 山 伊賀守 |
| 〃 高島郡宮野村 | 関 助 左 衛 門 | 〃 明石郡小神村 | 竹 中 鉄五郎 |
| 美濃 厚美郡岐阜小熊村 | 大谷八郎左衛門 | 〃 揖西郡中村 | 中 山 九郎兵衛 |
| 〃 厚美郡岐阜東 | 稻葉太郎左衛門 | 〃 揖西郡広頼 | 左 兵 門 |
| 下野 安蘇郡佐野天明 | 大 川 伊 助 | 美作 西条郡津山吹屋町 | 吉 田 河 内 |
| 若狭 遠敷郡金屋村 | 大野九郎左衛門 | 〃 大庭郡麻生 | 馬 淵 善大夫 |
| 〃 〃 | 北 孫 左 衛 門 | 〃 大庭郡台ヶ原 | 撰 津 大 掾 |
| 越前 敦賀郡鑄物師村 | 河 瀬 甚右衛門 | 備後 御調郡三原東町 | 吉 井 善七郎 |
| 〃 〃 | 竹 中 源右衛門 | 安芸 安芸郡海田船越村 | 植 木 源兵衛 |
| 加賀 石川郡金沢野町 | 平 井 与四兵衛 | 〃 佐伯郡二十日市 | 山 田 与右衛門 |
| 〃 能美郡開発村 | 松 本 久五郎 | 周防 吉敷郡小郡柳井田 | 武 波 平兵衛 |
| 越中 射水郡高岡金屋町 | 小 野 弥右衛門 | 長門 ？ | 守永五郎左衛門 |
| 〃 婦負郡富崎村 | 増田九郎左衛門 | 筑前 遠賀郡芦屋津 | 太 田 郷左衛門 |
| 越後 蒲原郡新潟 | 猪 苅 弥五兵衛 | 〃 国府太宰府 | 東 藤 右衛門 |
| 丹波 桑田郡馬路村 | 川 原 又兵衛 | 豊前 京都郡小倉キクノ之内 | 間 武 武三郎 |
| 〃 〃 | 川 原 清兵衛 | 〃 国東郡玉津 | 河 野 玄蕃允 |
| 〃 何鹿郡上林清水村 | 戸 越 越後家 | 肥前 松浦郡田代 | 藤川太郎右衛門 |
| 〃 天田郡福知山 | 足 立 四郎兵衛 | | |

(3) 蔵人所牒の本紙といわれるものを伝える戸数

| | | | | | | | | | |
|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|
| 河 内 | 1 | 撰 津 | 1 | 尾 張 | 1 | 遠 江 | 1 | 常 陸 | 1 |
| 近 江 | 2 | 美 濃 | 1 | 信 濃 | 1 | 越 前 | 1 | 加 賀 | 1 |
| 能 登 | 3 | 越 中 | 2 | 丹 波 | 5 | 播 磨 | 6 | 美 作 | 1 |
| 備 前 | 1 | 備 後 | 1 | 安 芸 | 1 | 周 防 | 1 | 長 門 | 1 |
| 筑 前 | 2 | 筑 後 | 1 | 豊 前 | 1 | 肥 前 | 1 | | |

九

八ヶ所の五十七軒が持ち伝えている。このうちで北陸・畿内以西は四十ヶ所の四十九軒（松本の田中家は元来近江出身）を占め、これに美濃と尾張を加えると残りは五ヶ所の五軒にすぎなくなる。また御蔵判物・御蔵下知状を伝える家は鑄物師の中でも旧家で、仁安二年牒・天福元年牒などの本紙とされる旧書が伝わっていることが多い。これらは紙質や字体などからして戦国時代以前に作成されたようなので、新見家が配布したものも多いと思われる。(3)表はそうした文書を持つ家の国別戸数である。これによれば全部で三十一ヶ所の三十八軒が牒の本紙と称するものを持っていることになる。この場合でも近畿・北陸

(4) 近世真継家配下の鋳物師居住地数と人数

| 国 名 | 居住地数 | 人 数 | 一ヶ所 平均人数 | 国 名 | 居住地数 | 人 数 | 一ヶ所 平均人数 | 国 名 | 居住地数 | 人 数 | 一ヶ所 平均人数 |
|-----|------|-----|-------------|-----|------|-----|-------------|-----|------|-------|-------------|
| 山 城 | 10 | 18 | 1.8 | 近 江 | 19 | 60 | 3.2 | 出 雲 | 2 | 15 | 7.5 |
| 大 和 | 5 | 17 | 3.4 | 美 濃 | 10 | 29 | 2.9 | 石 見 | 4 | 11 | 2.8 |
| 河 内 | 7 | 13 | 1.9 | 飛 騨 | 1 | 1 | 1. | 播 磨 | 23 | 92 | 4. |
| 和 泉 | 7 | 13 | 1.9 | 信 濃 | 13 | 27 | 2.1 | 美 作 | 4 | 15 | 3.8 |
| 摂 津 | 27 | 103 | 3.8 | 上 野 | 8 | 24 | 3. | 備 中 | 8 | 28 | 3.5 |
| 伊 賀 | 6 | 13 | 2.2 | 下 野 | 7 | 60 | 8.6 | 備 後 | 9 | 15 | 1.7 |
| 伊 勢 | 11 | 39 | 3.5 | 陸 奥 | 18 | 38 | 2.1 | 安 芸 | 4 | 6 | 1.5 |
| 尾 張 | 2 | 2 | 1. | 出 羽 | 7 | 10 | 1.4 | 周 防 | 2 | 3 | 1.5 |
| 三 河 | 5 | 15 | 3. | 若 狭 | 1 | 37 | 37. | 長 門 | 2 | 5 | 2.5 |
| 遠 江 | 1 | 1 | 1. | 越 前 | 8 | 33 | 4.1 | 紀 伊 | 3 | 6 | 2. |
| 駿 河 | 1 | 2 | 2. | 加 賀 | 11 | 27 | 2.5 | 淡 路 | 3 | 3 | 1. |
| 甲 斐 | 2 | 11 | 5.5 | 能 登 | 1 | 40 | 40. | 阿 波 | 3 | 5 | 1.7 |
| 伊 豆 | 2 | 3 | 1.5 | 越 中 | 11 | 142 | 12.9 | 讃 岐 | 5 | 14 | 2.8 |
| 相 模 | 3 | 9 | 3. | 越 後 | 10 | 125 | 12.5 | 伊 予 | 3 | 4 | 1.3 |
| 武 蔵 | 12 | 48 | 4. | 丹 波 | 12 | 97 | 8.1 | 筑 前 | 5 | 17 | 3.4 |
| 安 房 | 2 | 2 | 1. | 丹 後 | 12 | 48 | 4. | 筑 後 | 1 | 2 | 2. |
| 上 総 | 5 | 8 | 1.6 | 但 馬 | 19 | 49 | 2.6 | 豊 前 | 3 | 4 | 1.3 |
| 下 総 | 1 | 1 | 1. | 因 幡 | 4 | 25 | 6.3 | 肥 前 | 1 | 2 | 2. |
| 常 陸 | 3 | 11 | 3.7 | 伯 耆 | 11 | 29 | 2.6 | 総 計 | | | |
| | | | | | | | | 56 | 380 | 1,477 | 3.9 |

以西で二十八ヶ所の三十四軒を占め、これに尾張・美濃を含めると、残るのはわずか二ヶ所の二軒になってしまう。右の鋳物師居住地と近世に真継家が関係した鋳物師の居住地(4)表とを比較すると、新見家の鋳物師支配は西国を中心に行われていたといえるのではなからうか。そして連絡は御蔵判物・御蔵下知状によってなされ、配下の者には旧書として天福元年の牒や仁安二年の牒などが与えられ、新見家と個々の鋳物師とが繋がっていたといえよう。なお、天正年中に近江辻村から移住してきたと伝承される尾張知多郡久米村の鋳物師片山家には、

為當年責催促使者下向候、任先例員数、可致其沙汰状如件

天文九年三月 日

御倉民部少有弘判

という文書の写がある¹⁸⁾。また全く同文で天文十一年三月付の写もある。この写自体は新しいものであるが、同文で二度も出ていることからして全くの偽文書として退けるわけにはいかない。そして差出者を示すのに「御倉民

部少有弘」とあるので、これが御蔵判物・御蔵下知状と呼ばれていたものと考えられる。右の文書は宗弘が出した年貢催促状と同文であり、宗弘の文書が残存する地は御蔵判物などを伝えた地域と重なる。また近江で裏菊紋を許可したことは天福元年の牒の発給と同じ意味を持つ。このことから宗弘が新見家の者であった可能性は相当強いといえよう。

新見家の者が個々の鑄物師と連絡を取り続けていたとすると、新見家および鑄物師達の間で久直の新見家相続に対し強い反発があった筈である。事実天文十二（一五四三）年には「有弘跡職并鑄物師支配役義一家之内ヨリ相防」げがあり、久直は後奈良天皇の綸旨を得て対抗している。この一家は新見家であり、同家の者達が久直の相続に抵抗して鑄物師支配の策動をしたようである。また天文十五年には富弘が久直の相続に異議を唱え訴訟を起した。ついで注目されるのは次の後奈良天皇綸旨である。

諸国釜屋課役之事、御蔵久直為朝恩之處、今度内豎男称外記局之下知押妨云々、謀略之企言語道断之次第也、則於内豎男者被加御成敗畢、件課役如先々可全知行之旨、可被下知久直之由、天氣所候也、仍状如件、

天文廿年十一月十三日

（御蔵判物）
右中将（花押）

藏人中務丞殿

右によって、天文二十（一五五一）年に内豎男が外記局の下知として

近世初期における真継家の鑄物師支配（笹本）

諸国釜屋課役を押防していたことが知られる。ここに見える内豎は天文十五年四月の御蔵紀富弘三問状案に「富弘伯父内豎」と見える人物と同一人で、新見家の血を引くが故に久直の相続を認めないで押防したものと考えられる。¹⁹⁾久直が彼の押防を天皇綸旨によって制止せねばならなかったということは内豎の主張が鑄物師の側にも受け入れられ、行動がそれだけの効果をあげていたことを裏付ける。

真継久直の鑄物師支配に抵抗しようとする動きは天正八（一五八〇）年にもあった。それを示すのが次の正親町天皇女房奉書である。

「仰 天正八閏三廿五」

いせくのにあはそ・たこちくわやくの事、山科の御くらしゆりわうりやうのよし、いはれなく候、たひくのりんしにまかせ、ひさなをそんしいたすへきよし、申て候、ことにてん文廿ねんのちよくきいも候へハ、かたく申つけられ候へきよし、きたはたけの中将とのへ申くたされ候へく候、このよし申とて候、かしく

（切封ウハ書）

「（墨引）」

（御蔵判物）
日の、前大納言とのへ」

この文書で伊勢国の阿和曾と蛸路の二ヶ所の鑄物師課役を押領したとされる山科御蔵修理としては、御蔵小舎人の山科種満をあてることができ。山科家は新見家と同じ紀氏で、真継久直に跡職を譲った新見有弘より二代前の国弘から分家し、掌弘・常弘・次弘・種家・種満と続いている。²⁰⁾この系譜からすると種満は新見家が久直ののつとられ血

統が絶えたとして、自分こそ鑄物師支配紀氏の家系をつぐ者であり、役職もこれに応じていると主張できる立場にあったといえる。だからこそ正親町天皇は天文二十年の勅裁（既述の後奈良天皇綸旨）をもち出し、内豎の場合と同様だとして種満の押領を停めさせたのである。そしてこの事件を境にして、一応新見家の血を引く者達による久直の新見家相統および鑄物師支配に対する表立った抵抗は知られなくなる。

こうした新見家の血統を引く者の久直に対する反撃との関連で思い起されるのは、『家伝』が宗弘を説明するのに、「正親町院様御宇天正八年閏三月廿五日山科修理相防候節及言上、柳原殿副状女房奉書被成下宛」と、山科修理の押領に対抗すべき人物として記していることである。この記載からすると宗弘はたとえ新見家側の人であったとしても、反真継の側には加わらず、むしろ真継家側にくみしていたように受けとれる。おそらく真継家側では宗弘が加担していることで自分達に正統性があると主張でき、これがその後の新見家側の反撃を断つ大きな意味を持ったのではなからうか。

史料の欠如のために宗弘を新見家の中にどのように位置付けたらよいのかはつきりできない。ただ富弘と久直の争論の中で有弘の跡職相統の権利者として姿を見せないことから、宗弘は有弘の子や孫ではなさそうである。私としては天正八年の宗弘の立場をも考えると、彼は山科家の者ではないかと思っている。国弘から分かれ、しかも同じ御蔵小舎人であった山科家が、新見家を補佐しながら鑄物師支配にかか

わっていたことは十分に可能性がある。ところで山科家は分家してからも掌弘・常弘・次弘と、新見家同様に「弘」を通字としてきたが、次弘から後には種家・種満・康好とこれが用いられなくなる。しかも同家の系図を伝える『地下家伝』では、常弘まではだいたい官途受領名と位階が記されているのに、次弘には何の記載もなく種家へと続く。そこで山科家の場合も次弘から種家の間に、新見家が久直によってのつとられたのと同様の相統上の異変があったものと推察される。その時期は久直が新見家を相統したのとはほぼ同時期である。このことから種家の子種満と対決するために、山科の正統である次弘の血をひき、鑄物師支配にもかかわっていた宗弘が、真継久直に加担したのではないかと想像するのである。

四、真継家と宗弘

宗弘という人物が元来鑄物師を支配してきた新見家の血を引く者であったのなら、真継家の鑄物師支配と宗弘とはどのようなつながっていたのであろうか。また真継家では他家の者である宗弘を何故系図の中に取り込まねばならなかったのか、そして取り込んだ時期は何時頃だったのかが問題になる。

鑄物師のことを何も知らない久直が、鑄物師支配からの利益を目的にして新見家を相統するのには、新見家の鑄物師支配の実態を知っている者をかえ込み、新見家がどのような地域に住む鑄物師と関係を持ち、いかにして支配していたかといった知識を得る必要があった。

同時に鑄物師から直接年貢や公事を徴収して与えることができる者、あるいはこれから以後真継家が年貢などを徴収することになるということを、鑄物師に説得できる者を用意せねばならなかった。こうした役割を宗弘が負っていたことは間違いないであろう。

たとえば富弘との争論に勝って新見家相続を決定的なものにした久直が、何故最初の支配目的地として中国地方を選んだかということがこれにかかわる。真継家の主筋である柳原家が内氏と親しかったので、大内領国へは工策しやすかったということも一因であろうが、何よりも既述のように新見家の鑄物師支配がこの地域を中心としてなされていたので、これをそのままひきつこうとしたのではないだろうか。久直がこのことを考えるためには、ここが新見家の支配の中心地であつたことを教えた者がいた筈である。

また久直は新見家の鑄物師支配方法をそのまま受けついでいる。たとえば「鑄物師公事役」・「鑄物師役料」などは、「如以前」あるいは「任先例」などと、過去における新見家の支配を根拠に徴収しているし、石見の山根常安から「証跡」すなわち天文九年に宗弘が許可した石見国鑄物師統領職を請われると、「先例之筋目」ということでこれを許可している。この場合も誰か支配の方法を教える者があつたと推察される。

宗弘が天文十八年という、久直が中国地方の鑄物師支配を開始したばかりの時期に、この地域で鑄物師支配のための文書を出していることは、彼が久直に協力して新見家配下の鑄物師の居住地や支配のため

近世初期における真継家の鑄物師支配（笹本）

の方法を教えていたことを示すものであろう。この協力の故に福岡県の平井文書中には、久直の裏封のある天文十二年三月十六日付の後奈良天皇綸旨案、天文十八年三月十八日付の大内氏奉行人連署奉書案とともに、天文十八年三月付の宗弘の年貢催促状が残っているものと考えられる。同時にこの時期に久直でなく宗弘の名によって年貢催促がなされていることは、彼の名前なら鑄物師から年貢がとれるという目算があつたのであろう。

このように宗弘は久直に協力していたにもかかわらず、彼の出した文書の点数は少なく、天文二十二年以後消えている。久直としては宗弘が支配の前面に立つて鑄物師に接し、あまり長期間真継家に留まると、実権を握られ、新たに支配の権利を継承した真継家としては不都合になると考えたのであろう。そこで宗弘はなるべく表立つたところに出さず、自分達がある程度支配方法を学び取り、支配の方向が決まった段階で縁を切ったのではなからうか。

仮に右のような事情があつたとすると、真継家としては宗弘の名を系図などに出さない方がよい筈である。にもかかわらず、宗弘を何故系図の中に取り込んだのであろうか。前記の真継家の鑄物師支配経過から、久直・康綱の段階でこれを行ったとは到底考えられない。このことは真継家が各地の鑄物師に配布した、その原形を久直・康綱がつくつたと考えられる「鑄物師由緒書」に、天文二十三年三月付の久直と寛永元年三月付の康綱の名前しか記載されておらず、宗弘の姿がないことから裏付けられる。ところで真継家の系図として広く利用さ

れる『地下家伝』は、三上景文によって弘化元(一八四四)年に編纂された。その下敷には文化二(一八〇五)年に「地下諸家の伝召された節の記録」があるが、いづれにしろ十九世紀に入ってから書かれたものである。²²⁾一方真継家文書中の『家伝』は久忠までの記載がされてあるが、残っているのは真継能弘(一八三〇年生まれ)の写したものであり、記載内容も近世中期以降に付け加えられている。そこで宗弘に関する記載も近世中期以後に加筆された可能性が高い。

宗弘が近世中期以降になってから系図に加えられた可能性が高いということになると、康綱以後の真継家の概略を知る必要がある。真継家では康綱の後を康利・親賢と嗣ぐが、親賢は「當家相統暫時」²³⁾而後候青蓮院尊純法親王谷家は也」と他家へ移った。しかしこのことについて『家伝』には、「青門様坊官谷家之儀者矩弘記寛保三²⁴⁾亥年正月見聞雜誌有之候、仍矩弘之處²⁵⁾而知ル事」とのみ注されていて、他家を相続した事情は不明である。その後真継家は久忠・玄弘と続いた。康利から四代の間には(5)表のように、鑄物師支配のための文書をほとんど出しておらず、この間の支配は極めて弱かったようである。²⁶⁾玄弘の後には珍弘・矩弘・量弘・康寧・則能・能弘と継いだ²⁷⁾が、この間は(1)表のように多量の鑄物師あての文書を出しており、真継家の支配の最盛期にあたっている。同時に珍弘に至って、久直以来使用されなかった新見家の通字である「弘」が使われるようになり、以後これが通例となった。

宗弘を真継家の系図に組み入れたことの一つの目安は天正座法の成

立であるが、真継家がこれを配下の鑄物師に配布した確実な時期は、前掲(1)表のように親弘の代になってからで、彼の代までには宗弘が系図に入れられたといえる。なおこの表によれば、座法の原形をなす「定」が最初につくられ、それをまとめたおす形で「鑄物師職座法之掟」すなわち近世の一般的な座法、さらにその中心をなすものを漢文化した天正座法という順序で、座法が成立していったといえる。そこで近世的な鑄物師支配を開始した珍弘、これを推進した矩弘、そして天正座法を配布した親弘あたりが、宗弘を系図に組み入れた可能性が高い。また真継家文書中の御藏新見有弘讓状写の紙背には、久忠・珍弘・矩弘の名が記され、量弘が加補している。このように三人の中では矩弘が、系図作成上に大きな役割を果たし、自家の文書の確認をしている上に、天正座法のもととなる座法を配っている²⁸⁾ので、彼が宗弘を真継家系図の中に取り込み、これを前提にして親弘が天正座法を作成していったのではないかと思われる。真継家が宗弘を系図の中に取り込んだのは、珍弘以降の近世的な鑄物師支配の基本法として制定した近世座法の徹底をはかるために、近世座法の要旨を漢文化して制定年度を遡らせ天正座法とし、権威付けをしようとしたからである。そのため天正座法の制定者としては、珍弘以降鑄物師を支配する家の通字として「弘」を用いた以上、この字が名前に入っている人物で、しかも久直が新見家を相統して以後活躍し、旧書調査の折に時たま姿をあらわしはするが、実態がはっきりしない宗弘の名前を用いたものと考ええる。

五、江戸幕府と真継家

近世前期が真継家の鋳物師支配の最盛期であったとする通説のもう一つの柱となっている、真継家は「家康公の支配許可を背景にしてしだいに勢力を強め」という中川氏の指摘は正しいのであろうか。最後にこの点について確認してみたい。

真継家文書で徳川家康と真継家との関係を直接示すと思われるのは、天正十七（一五八九）年十一月二十七日付の徳川家伝馬手形一通にすぎない。しかもこれは当時久直が豊臣秀吉と結びついていたことから、秀吉の勢力の東国拡大に家康が応じて出したものと考えられ、あくまで秀吉の権力を前提にしなければならないので、家康が積極的に真継家を応援していたとする証拠にはならない。また仮にこの時期に家康が真継家に協力的であったとしても、その態度を幕府成立後にまで堅持したとは限らない。そうすると中川氏の主張は確実な史料に裏付けられたものとは言えなくなる。

また別のところで中川氏は、江戸幕府と真継家との関係を次のように記している。

慶長十六年、真継美濃守康総は、次の写文書（栃木県佐野市正田治郎右衛門所蔵）にみるように、幕府により支配の承認をうけているのである。

藏人所御藏真継美濃守康総（本多正徳）

朝恩之事、諸国鋳物師之儀先規之通称（本多正徳）以可有之者也、於鋳物師は

近世初期における真継家の鋳物師支配（笹本）

免除、筋目不可有相違之由、家康公仰之旨、仍而執達如件

慶長十六年三月十一日

横山山城守

書判

酒井左衛門大輔

書判

真継美濃守様

この幕府公認と、古来よりの伝統的権威を背景として、近世期を通じて支配を続けていったのである。

ここに中川氏が提示された連署奉書は、現在でも鋳物師の家に多くのが伝わっている。しかしその文言は様々であり、写も当時のものではなく近世中期以後につくられたものである。また真継家文書中にもこれと同様の文書の写があるが、網野善彦氏が「慶長十六年三月十三日付の横山山城守、酒井左衛門大輔連署奉書が伝わっており、家康より特権を保証されたいの文書としているが、正文は存在せず、様式からみても疑問がある」と評価しているように偽文書としてよい。そこでこの文書をもとにした中川氏の主張は弱いように思われる。

ただこのような偽文書が作成されるだけの理由はあったようで、真継家文書中には次の三点の文書が残っている。

(1) 安藤重信書状

貴礼拜見忝存候、御暇之儀被仰上由、尤存候、今日登城仕候間、
佐州相談仕、御暇之儀可申上候、御宿ニ可有御座候、自是御左右申
上候、万事取籠申候ニ付而、御見舞不申、背本意候、猶面上可得御

意候條、可能詳候、恐惶謹言

八月十一日

重信(花押)

(檢封ウハ書)

(墨引) 真継美濃守殿

貴報

安藤対馬守

重信

(2) 酒井忠世書状

先刻者得御意候、仍鑄物師役之事、為 朝恩之處、御綸旨所持之上者、別儀有間敷候、若相滯子細等候者、可被遂言上候、然者今以諸国へ相触ニ不及候、御暇被出候上者、勝手次第御帰洛可被成候、恐々謹言

八月十二日

酒井雅樂頭

忠世(花押)

真継美濃守殿

進之候

(3) 本多正信書状

尚以御仕合能御上之事候條、御心安可被思召候、以上

被成下貴礼忝拜見仕候、仍 將軍様へ為御目見、真継美濃守殿御下向付而、被仰下候趣、披露仕候處、御前御仕合能御帰洛之御事候、尚爰元之様躰、委曲美濃守殿可被仰達候條、不能一二候、恐惶謹言

八月十二日

本多佐渡守

正信(花押)

(大炊御門様宛)
大炊大納言殿

貴報

さらにこれらの文書について、真継家の『家伝』は、

(同左)
一同 十二年九月 日

元和 年閏東江罷下り、弥先々之通被仰出御目見被 仰付候、秀忠公御世酒井雅樂頭ヨリ書状、右下向之節従大炊御門大納言殿本多佐渡守殿江副状、帰路右返書并安藤対馬守殿江相願候返書當家宅と記している。

こうした文書から、慶長十二(一六〇七)年あるいは同十六年頃に、真継康綱が大炊御門経頼を仲介者として、二代將軍徳川秀忠に御目見得したことは事実といえよう。しかしそれは中川氏のいう「家康公の支配許可」とか、「幕府により支配の承認をうけている」ことに直結するものではない。むしろ(1)で安藤重信が「万事取籠申候ニ付而、御見舞不申」と、どちらかという冷淡な態度をとったり、(2)で酒井忠世が「鑄物師役之事(中略)別儀有間敷候」としながらも、「然者今以諸国へ相触候ニ不及候」と述べていることからして、幕府としては真継家の支配に対し積極的には後援しないという態度とっているのである。

それでは何故に康綱は秀忠と会見しようとしたのであろうか。各地に残る久直・康綱の文書は(5)のように案外少なく、これを(1)表の近世中期以降に真継家が配下の鑄物師にあてた文書と比較してみると、その差は歴然としている。この少なさは久直・康綱の精力的な活動にもかかわらず、実際には真継家による直接的な鑄物師支配が、末端部分まで固定するには至らなかったことを示すものであろう。特に幕藩体

(5) 鋳物師の家に残る戦国時代から近世前期にかけての真継家発給文書

| 文書の種類 年代 | 御 蔵 判 物 | 宗 弘 判 物 | 久 直 判 物 | 康 綱 判 物 | 康 利 判 物 | 源 太 夫 判 物 | 玄 以 判 物 | 久 忠 判 物 | 真 継 家 発 給 文 書 | 口 宣 案 ・ 受 領 名 | 女 房 奉 書 | 旧 書 類 写 | そ の 他 |
|-------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|-----------------------|------------------|------------------|---------------------------------|---------------------------------|------------------|------------------|-------------|
| 1530～1549 | 1 | 3 | | | | | | | | 4 | | 4 | |
| 1550～1569 | | 1 | 1 | | | | | | 2 | 2 | | 1 | |
| 1570～1589 | | | 1 | | | | | | | 3 | 3 | | 2 |
| 1590～1609 | | | | 2 | | | | | 9 | 9 | 1 | 1 | 4 |
| 1610～1629 | | | | 2 | 1 | 1 | | | 1 | 5 | | | 3 |
| 1630～1649 | | | | | | | 1 | | 2 | 1 | | | |
| 1650～1669 | | | | | | | | 2 | 1 | 3 | | | |
| 1670～1788 | | | | | 1 | | | | | 4 | | | |
| 年代不明 | 7 | | 4 | 4 | 2 | 1 | | 1 | | | | | |
| 計 | 8 | 4 | 6 | 8 | 4 | 2 | 1 | 3 | 15 | 31 | 4 | 6 | 9 |

制が成立して、伝統的な権威である朝廷や公家の相対的地位が低下し、しかも信長や秀吉とちがって、家康以来幕府が積極的に真継家の支配を援助しない状況下では、鋳物師達としても既に地域の領主に年貢を取られている以上、単に古くからの由緒だけを根拠とする真継家

近世初期における真継家の鋳物師支配（笹本）

へ年貢を出すことを渋り、真継家との連絡を断つようになるのは当然といえる。こうした中で康綱は支配の閉塞状態を打ち破るために、江戸幕府から鋳物師支配の正統性を承認してもらい、幕府権力を後楯にすることで支配に挺入れをしようとしたのであろう。このために大炊御門経頼を通して、幕府の有力者である本多正信にとりいり、秀忠との御目見得が可能になった。しかし秀忠としては幕府独自で鋳物師を支配し、各藩は藩で鋳物師を支配するという、藩領域を基礎とする支配体制をつくりあげたからには、これに対立するともいえる公家を中心とする全国鋳物師支配は認めるわけにはいかなかった。それゆえ幕閣の酒井忠世は、「鋳物師役之事（中略）別儀有間敷候」と述べながらもこのことを諸国へ申し触れることを断わり、真継家の主張を黙殺してしまつたのである。そしてこれから以後も幕府は独自の鋳物師支配を続けたので、真継家の支配が最盛期を迎えた時期に至っても、江戸・大坂・京都・名古屋などの江戸幕府と関係の深い地域に住む鋳物師は支配に組み込むことができなかった。⁽²⁵⁾このことから幕府が真継家に協力していたとはいえないのである。こうして康綱は秀忠との御目見得はできたものの、所期の目的は達成されなかつたので、その後康利から四代にわたってはほとんど鋳物師支配を行うことができず、そこからの収益もあがらなかつたために、親賢のように他家を相続する者が出てきたのであろう。

その後珍弘の代になって真継家と鋳物師の関係が形をかえて復興してくる中で、宗弘を真継家の系図に取り込んだのと同様の意味をも

って、真継家の支配は幕府からも認められているのだと主張するために、(1)から(8)の文書を前提にして前掲の横山山城守・酒井左衛門大輔連署状が作成され、真継家の鋳物師支配の道具にされたのであろう。

おわりに

本稿では真継家の鋳物師支配は近世前期が最盛期であったという、これまでの通説を再検討するために、まず小原昭二氏の論文の根底におかれたことを私なりに整理した上で、

一、宗弘は真継久直の子で康綱の父といった人物ではなく、むしろ久直にのっとられた新見家の血を引く可能性が大きい。

二、天正四年段階では真継家の鋳物師支配は全国に及んでおらず、座法を作り得るような状況ではなかった。

三、天正座法は天正四年につくられたものではなく、近世中期以降に偽作されたと考えられる。

と、小原氏の説が弱いものであることを論じてきた。また中川氏の、真継家は「家康公の支配許可を背景にしていだいに勢力を強め」という指摘も、事実に基づくものとはいえないことを明らかにした。このように通説が事実と違っているとするなら、久直・康綱による戦国から江戸時代初期にかけての鋳物師支配、および近世の真継家の鋳物師支配全体を、どのように再構成したらよいのであろうか。その展望を述べることでおわりにかえたい。

久直が借金のかたに新見家を相続したのは、新見家が鋳物師を支配

してきた家だという点に着目し、そこからの収益に目をつけたからだと考えられる。そのために彼は一人でも多くの鋳物師と接触し、彼等を真継家の支配に組み込んでいかなければならなかった。この際は内氏のような戦国大名に協力を求め、権力を利用して上から鋳物師と連絡をとろうとした。一方戦国大名の側としては、これに協力することで公家、さらには朝廷と結びつくことができ、その権威を利用すれば領国の支配がやりやすくなり、中央政界においても政治的立場を有利にすることも可能だった。また鋳物師としても、戦国大名にいろいろな役をかわされていたので、これを免除されれば真継家の配下に入っても負担が以前よりそれ程大くなるわけではなく、むしろこれと結びつくことによって戦国大名の領国に縛りつけられることなく、広域にわたっての往来保証を得られるという利点があった。こうした真継家・戦国大名・鋳物師の三者の利益の一致によって、久直の活動は急速に実を結ぶかにみえた。そして全国統一を目指した織田信長も豊臣秀吉も天皇権威を利用するために久直の活動の後押しをしたのである。しかし、戦国から近世へという打ち続く戦乱の中で、種々の道具や武器の製造などを業とする鋳物師を、大名はどうしても直接支配する必要がある、動員体制も整えていかなければならなかった。このため鋳物師に諸役免許をして真継家の配下に入らせるといった名目とはうらはらに、彼等に諸役を任せ領国の中に閉じこめていった。そこでせっかく真継家が支配に組み入れたと思った鋳物師の中からも、連絡を断つ者がでてきた。

そうした中で江戸幕府が成立したが、真継家は秀吉との関係もあって、もっぱら関西に基盤を置く豊臣氏と結びついていたので、これと対抗し距離的にも京都と離れた関東を基盤とする徳川氏とは接触がなかった。幕府は真継家の支配に協力せず独自に鋳物師支配を固め、各藩もそれぞれに支配をすすめていった。こうして流れに逆らうように再度真継家のもとに全国的な鋳物師組織ができ、それが朝廷に結びつくことになる。幕藩体制と対立するものになり、幕府の全国支配の障壁ともなりかねなかった。しかし幕府自体が天皇より征夷大將軍に任ぜられることを前提にして成立している以上、朝廷および公家を否定することはできず、真継家も下級公家として日光例幣使という公武の接点となる役を負っていたので、その家職である鋳物師支配を打消しえなかった。そこで幕府としては一応これを認めはするが、積極的に援助することはせずあくまで黙認するという態度をとった。幕府の強力な後押しがないため、特に幕府成立以後は鋳物師の真継家離れが進行し、近世期の康利から四代にわたる時期には真継家の支配はほとんど名目だけになったため、ここからの収益もあがらなくなり、経済的に逼迫してきて親賢のように他家を相続する者も出てきたのである。

ところで小原氏は、真継家文書の『寛永年中以後鋳物師共及出入候覚』にみえる真継家と鋳物師とのかわりをもって、天正座法に記される「検断権」の行使だと述べ、真継家の鋳物師支配がいかに強かったかの証拠にしている。しかしながら争論の内容を見れば明らかでない。

近世初期における真継家の鋳物師支配（笹本）

うに、多くの場合新鋳物師の出現などによって市場を奪われた旧来の鋳物師が、自己の権益を守るために過去の特権を確認してくれる家として真継家を見出し、連絡をとってくるのである。つまり商品経済の進展とともに鋳物師の活動も全国的に盛んになってきて、一方で自分達の活動が藩領域の枠からはみ出るようになり、他方で新鋳物師の出現や他所からやってくる鋳物師のために自分の市場を荒されることが多くなってくる中で、各領主ごとの藩領域を越えた争論の調停者、自分達の市場特権を確認してくれる者が、鋳物師の側として必要になってきたのである。その調停者・市場確認者として旧くから鋳物師を支配してきた公家の真継家が再度見直され、改めて連絡をとってきたのであり、主体はあくまで鋳物師の側にあった。真継家の力添えによって鋳物師は立場を有利にしたが、三河牛久保の鋳物師のように一旦勝訴すればそれきりまた真継家との連絡を断ち、真継家から年貢の納入を求められても応じないような者もあった。⁽²⁶⁾これに対して真継家では何の制裁措置もとれなかった。こうした状況からしても、これが「検断権」の行使であり、ひいては近世前期が真継家の支配の最盛期だったとすることはできない。

しかし、『寛永年中以後鋳物師共及出入候覚』にみえるような、藩領域をこえた鋳物師相互の活動によって生じる争論の調停者、また旧来の鋳物師の市場特権を確保できるような由緒確認をしてくれる者が希求されている風潮は、時の経過・流通経済の進展とともに大きくなる一方だったので、真継家としても何らかの形でこの求めに応じ、な

おかつ家としても収入を得ることのできる新たな支配方式を考え出さねばならなかった。その成果こそ珍弘の代になってからあらわれる鑄物師職許状にほかならない。真継家としては鑄物師あるいは自家の代替わり毎にこれを書き替えることで札銭を得て収入とし、逆に鑄物師としてはこれを得ることで旧来の特権が確認され、市場独占できることになった。そして許状の創出によって、(1)表のように近世中期以後に真継家の鑄物師支配は最盛期を迎えるのである。

〔注〕

- (1) 小原昭二「近世における真継家の鑄物師統制について」『地方史研究』一七四号・一九八一
 - (2) 拙稿「中世・近世の美濃鑄物師」『日本歴史』三九五号・一九八一・「河牛久保の鑄物師と真継家」『信濃』三三卷九号・一九八一
 - (3) 『史学雑誌』一九八一年の歴史学界―回顧と展望―（九一編五号・一九八二）一二二頁
 - (4) 中川弘泰『近世の鑄物師―真継家を中心として―』（近藤出版社・一九七七）
 - (5) たとえばこの説は『枚方市史』や内田三郎『鑄物師』（埼玉新聞社・一九七九）でもとられている。
 - (6) 拙稿「甲斐の鑄物師」『信濃』三三卷八号・一九八〇
 - (7) 『徳川禁令考・前集第五』（創文社・一九五九）二一九頁、一部を左に示す。
- 真継佐渡守儀、先祖より諸国鑄物師職之支配仕、許状差遣、職分爲仕候処、近代座法致混雑、国々鑄物師共許状をも不請、職分仕候趣ニ付、只今迄相隨罷在候鑄物師共ニ申付、諸国一統相改、座法之通、貞継家代替并国々鑄物師職相統之度々致上京、繼目之許状を請、御即位之節も致上京、恐悦申上、常々年始八朔等之嘉儀、真継家ニ相勤候様仕度、尤新職之もの往古之節目無之

候得、職分差留候様被仰付候へ、為眞加江戸表御台所御用之銅鍋百器、年々差上候様仕度旨申上

- (8) 両氏は量弘の願書の文意をそのままに受けとり、江戸時代中期から真継家の鑄物師支配が弱くなったと結論付けた。しかし(1)表および(5)表から明らかのように、真継家が鑄物師職許状を出すのは珍弘の代になってからで、座法ができあがるのも矩弘代である。つまり量弘としては珍弘以来の鑄物師支配が軌道に乗ったことを前提に、願書のように主張することで支配の正統性を幕府から認めてもらい、幕府権力を背景にして支配を全国に広めようとして願書を出したのであり、願書は両氏の説とは逆に、真継家の鑄物師支配がこの時期に強くなってきたことを示すものである。

- (9) ちなみに豊田武氏は、鑄物師職座法を「天正四年（一五七六）に定められた鑄物師の統制規約」（中略）この規約は、『鑄物師職座法之掟』と題して、鑄物師の独占権と義務を規定した七カ条で、天正四年八月十三日御藏宗弘が判を押している。文中疑わしい点もないではないが、真継家では江戸時代を通じてその代替りごとに諸国の鑄物師に書き与え、鑄物師の営業の規約として守らせた」と説明しており、天正座法イコール鑄物師職座法と理解し、一応これを認めているようである（『国史大辞典』吉川弘文館・一九七九）。

- (10) 網野善彦『偽文書について―その成立と効用―』（『書の本日本史』第四巻・平凡社・一九七七）・「鑄物師」『講座日本の民俗』第五巻・有精堂・一九八〇

(11) 真継家系図（『地下家伝』八より）

| | | | | | | |
|--------|---------------------|------|------|------|------|------|
| 則弘 | 武内宿禰後胤 補藏人所御藏小舎人 | 友弘 | 左衛門尉 | 景弘 | 日向守 | 在弘 |
| 右馬允 | 從五位下 | 從五位下 | 從五位下 | 從五位下 | 從五位下 | 從五位下 |
| 大藏丞振津守 | 元弘 | 民部大丞 | 民部小輔 | 高弘 | 民部大丞 | 從五位下 |
| 從五位下 | 始而鑄物師共公用之鑄物執奏 | 從五位下 | 從五位下 | 從五位下 | 從五位下 | 從五位下 |
| 頼弘 | 民部大丞 | 遠弘 | 民部大丞 | 左衛門尉 | 兼弘 | 從五位下 |
| 從五位下 | 從五位下 | 從五位下 | 從五位下 | 從五位下 | 從五位下 | 重弘 |
| 加賀介 | 豐弘 | 加賀介 | 安弘 | 中務丞 | 種弘 | 出雲介 |
| 從四位下 | 正四位下 | 從五位下 | 從五位下 | 從五位下 | 從五位下 | 彈正忠 |

國弘 彈正忠 大永八年四月 有弘 山城守
正五位下 忠弘 任民部權少輔

久直 有弘男
天文年中改新見為真繼
同三年九月二十日叙正六位上
同十四年二月八日任兵庫助
永祿三年正月十五日叙從五位上
天正十四年二月七日任伊豆守
慶長三年六月二十日卒

宗弘 久直男
石見守
早世

宗弘男
天文二十一年、寛永元年十月二十日
元龜二年正月二十七日叙爵
慶長四年七月十七日任美濃守
同十四年九月伊勢國皇太神宮奉幣
御再興之節依別勅兼齋部姓
其後連綿而勤仕之

康綱 康利男
元龜二年正月二十七日叙爵
慶長四年七月十七日任美濃守
同十四年九月伊勢國皇太神宮奉幣
御再興之節依別勅兼齋部姓
其後連綿而勤仕之

康利男
元和八年、
當家監而後候青蓮
院尊純親王舍是也

月二十八日 親賢 久忠
元和八年、
當家監而後候青蓮
院尊純親王舍是也

久忠 親賢男、河越源重忠男
元和二年、延宝六年七月
兵部大丞 伊予守

六日 玄弘 久忠男、母康利女
寛永十八年、貞享元年七月十五日 珍弘
宮内大丞 寛文十二年六月三日
宮内大丞 刑部少輔

享保十八年七月十三日 矩弘 珍弘男
宝永五年正月二十三日、宝曆三年九月二
宮内大丞 若狹守 美濃守

十二日 親弘 矩弘男、一条家侍森沢兵庫大允藤原長次男
天明七年七月二十四日、文政十年十一月二十三日 量弘
能登守 美濃守

親弘男
宝曆十年七月二十二日、天明三年十一月十七日
右衛門少尉 佐渡守

康寧 量弘男、一条大夫森沢阿波守藤原長養次男
天明七年七月二十四日、文政十年十一月二十三日
能登守 美濃守

則能 康寧男
文化七年十月十日、嘉永三年十二月二十四日 能弘 則能男
石見守 能登守 天保元年、
大和介大監物

近世初期における真継家の鑄物師支配（笹本）

大和守

(12) 名古屋大学文学部国史研究室編『中世鑄物師史料』参照のこと。以下特
別なことがない限り同書による。なおこの本の解説は網野善彦氏の手にな
る。

(13) 『家伝』（真継家文書）

(14) 三重県桑名市中川家旧蔵の『諸国鑄物師文花名前写』（坪井良平氏の写本
による）には、「天文九宗弘ノ統領免状」とある。

(15) 『中世鑄物師史料』の解説で網野氏は、天正四年の座法について「宗弘
は『地下家伝』によれば、早世した久直の子息とされており、一九七号、成巻
文書などに、すでに「座法」という言葉がみえるので、このころ鑄物師の座
法が存在したことは間違いない。しかし、偽牒の文言、宝徳の座法（成巻文
書三号）の内容、鑄物師由緒書の一部まで第三条にとり入れたこの座法がそ
れであるのかどうかについては、原本の存在しない以上、なお疑問としてお
かなくてはならない。近世を通じての鑄物師座法の原型となったこの文書の
形がととのえられたのは、一応、江戸前期とみておけば間違いはなからう」
と説明している。また宗弘の祝儀催促状については、「宗弘が御藏職の代替
りに当って鑄物師から祝儀を催促した文書であるが原本は伝わらない。座法
の第八条とびつたり符合しており、前号の座法と同じく疑問をさしはさむ余
地がある。やはり江戸前期に作られたものではあるまいか」と解説し、両者
共に偽文書の可能性があることを指摘されておられる。

(16) 『中世鑄物師史料』

(17) 『覚書帳』（真継家文書）

(18) 片山家文書については上村喜久子氏より御教示を得た。

(19) 富弘と久直の三問三答状からすると、忠弘以降の新見家の本当の系図は
次の如くなる。

忠弘——有弘——孫三郎——富弘
弥三郎忠弘——大沢子を猶子とする
内豎——男

名古屋大学文学部研究論集（史学）

(20) 山科家図（『地下家伝』より）

則能 武内宿禰後胤 補藏人所御藏小舎人 友弘 左衛門尉 從五位下 景弘
 右馬允 從五位下

日向守 在弘 大藏丞 撰津守 賴弘 民部大丞 遠弘 左近衛將監 從五位下
 正五位下 從五位下

兼弘 從五位下 重弘 加賀介 豐弘 加賀介 種弘 出雲介 彈正忠
 從四位下 從四位下 正五位下

國弘 彈正忠 出雲守 掌弘 常弘 彈正忠 出雲守 次弘
 正五位下 從五位下

種家 天正十二年十一月三日 種満 修理亮 出雲守 康好
 叙從五位上 從五位上

（以下略）

(21) 天文十二年三月十六日付の後奈良天皇論旨によつて有弘跡職相続を公に認められた久直は、今川義元と連絡をとり彼の協力を約する書状を得た。真継家文書に残るものは案文であり、やや疑問も残るが、このように協力をとりつけながらもその後今川領国の鑄物師と關係を持つていないのは、ここが新見家の支配をうけていなかったため、鑄物師の側にそれを受け入れる下地がなかったからではあるまいか。

(22) 正宗敦夫「地下家伝解題」（『地下家伝』自治日報社・一九六八）

(23) (1) (5) 表の原典については、拙稿「近世真継家配下鑄物師人名録(1)」・

「同(2)」(『名古屋大学文学部研究論集』史学28・29・一九八二・一九八三)を参照していただきたい。

(24) 注(4)と同じ。ちなみに『地下家伝』も中川氏も、康綱を康総としている。この二つの字はくずし方がよく似ているためであるが、やはり康綱が正しいようである。

(25) 前掲『徳川禁令考』の「諸国鑄物之事」参照。

(26) 拙稿「三河牛久保の鑄物師と真継家」

(27) 近世の真継家と鑄物師の關係の概略については、拙稿「近世の鑄物師と鍛冶」（『講座・日本技術の社会史・第五巻・採鉱と冶金』（日本評論社・一九八三）を参照していただきたい。